

靴の歴史散歩 ⑧1

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

「靴の歴史散歩」も前号でちょうど80回を迎えた。年4回の発行だから、80回といえば連載そのものが20年になったということである。自分の伝えたいことを自由に書かせていただけたから続けられたのであって、正直なところ、20年という実感がまったくないのが不思議なくらいである。

さてこの春、発行元の皮革技術センター台東支所気付で、目黒区に住む孫田良平さんという方から、カラーコピーの古地図まで添えられたお手紙を頂戴した。

これまでに、「靴の歴史散歩、読んでますよ」という程度のお声は掛けられたことはあったが、お手紙まで頂戴したのは今が初めてで、恐縮するやらうれしいやらで、思わず何ども読み返してしまった。

お手紙には、現在連載中の内田靴店に関することが書かれていて「……内田靴店は戦前、父（1882-1957）がいつも買っていた店で、私（1920-）も時々行きました。お書きになった件、桜田本郷町は市電の停留所の名で、内田靴店は桜田伏見町、そこへ行くには市電桜田本郷町停留所前ということになります。」と書かれてあった。

『かわとはきもの』（No.134）の内田直二商店の書き出しで、桜田伏見町二番地でありながら、なぜ桜田本郷町の内田といわれたのか、という疑問を、見事に氷解させる内容であったから、大変うれしかった。

私なりに解明しようと思い、手元に揃えた資料もあるので、孫田さんのご教示に合わせ、読み解いてみようかと思う。

大正14年（1925）の『帝国都会地図』の裏面にある「東京市街電車図」を見ると、

大塚線と外濠線の乗換えポイントとして「桜田本郷町」の停留所表記が見える。

昭和7年（1932）、大東京35区制で町名変更が行なわれ、桜田周辺は芝田村町1、2丁目と生まれ変わった。

それを昭和8年（1933）の東京市電気局発行の『電車運転系統図』で見ると、停留所も「田村町一丁目」となったことが確認できた。

孫田さんのお陰で宿題も一件落着いたので、また話を前に進めて行きたい。

田村町の交叉点にこだわるわけではないが、かつて内田商店があった頃、交叉点の斜め向いに海軍さんの顧客で繁盛した鈴木カバン店というのがあった。幸いにもそのカタログ（大正5年頃）も所蔵しているので、周辺の往時を偲ぶよすがに、ちょっと一息ご覧になっていただきたい。（写真参照）

